
UN:KNOWN 3

エイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UN: KNOWN 3

【Nコード】

N6887L

【作者名】

エイト

【あらすじ】

ある女性は世界、そして、自分の異質さに気づいてしまった。その女性は世界と自分にある決断を下す。

こういうことを考えたことがあるだろうか。自分の生きている世界を把握している自分の価値観は自分が生きてきた世界で抵抗する術もなく押し付けられたもので、ということとはもしその世界が本当はありえない世界だとしても自分がその世界の内部で生きて価値観を養ったとすれば一体どうすればその世界がありえない世界と気づけるだろうか。答えはこうである。気づけはしない。つまり、この世界から脱出し、客観的に今までいた世界を見る以外には方法はないのである。だが、それは不可能である。故に先ほどの解答にたどり着く。

この物語の主人公の、今となってはわからないが、非劇または喜劇なところはそれに気づいてしまったことである。これも真実だがありえないと。この物語を最後まで読んだのなら、もう教えることは不可能であるのだが彼女に教えてあげて欲しい。あなたの物語はだつたと。

この物語の主人公である女性は能力を持っていて、現在、戦闘の真つただ中であつた。相手はどこにでもいる普通の高校生。違うのは能力を備えているところである。優位に立つ彼女は決着をつけるために彼に向かって走って、そして、決着はついた。彼女は生き残つた。目の前に落ちた指輪を拾い上げうすら笑い。と、次の瞬間、指輪が光り何が起こっているのかと彼女が把握する前に彼女はそこから姿を消した。

次に彼女が目にした光景は空だつた。青空と少しの雲が目の前に広がっている。彼女は自分が寝そべっているのに気付いて上体を起こす。コンクリートの地面。辺りをキョロキョロと見渡すと右側に扉。彼女はこの扉に見覚えがあつた。自分の考えがあっているかを

確かめるために歩いて真っ直ぐに金網のところまで行く。下にはグランドが広がっていた。

「ここは……私の通っていた中学？」

何故ここにいるのかわからない。ただ、ただ困惑している。とにかく、どうなっているのか把握するために少しでも手がかりが欲しいので学校の内部へと行こうと踵を返したところで制服を着た眼鏡の少女と目が合う。無表情の女の子に対して彼女は驚いてしまう。なぜなら、そこにいたのは、まぎれもない中学時代の自分だったからだ。驚きで声がでない。そっくりさん……ではない。確信できる。

何て言おうか、どうしようかと彼女が考えていると中学時代の自分が口を開く。

「ねえ、私はちゃんとなりたいたい自分に……小学校の先生になりますか？」

突然の言葉にビックリする。同時に思い出す。そういえば、中学校時代の自分は小学校の教師を目指していたと。彼女は特に残念そうな顔もせず、

「ううん。別に小学校の先生になりたいわけじゃなかったのよ」

と、答える。中学校時代の自分は睨みつける。

「どうして、夢をあきらめたの？ 私は……」

「夢じゃなかったのよ。あれは。ドラマに影響されてただけ」

彼女は何故そんなことを聞いてくるのか、自分はそれどころではないのに……。と、そういう思いからめんどくさそうに答える。

「違うわ。私は小学校の先生になりたいんだもの」

「あのね。違うのよ。勘違い。それに夢なんて簡単に叶うわけないでしょ」

「どうして、夢をあきらめたの？ 誰かに苛められたの？」

彼女は無視して自分の横を通り過ぎようとする。が、手首を掴まえられる。自分の方を向くが、自分は前を見たまま。

「何で……。あんなに頑張っていたのに……」

彼女は自分の手を振りほどいて捨て台詞のように吐く。

「頑張ったって……。だから……。無理なことだっただけあるのよ」
そして、目の前にドアノブを回して扉を開いた。

彼女はドアを背にして先ほどと同じところにいた。ただ、自分は
いなかった。横から声が届く。

「そうよね。諦めたっていいのよね。あれは夢じゃなかった。誰
だって夢の一つや二つ諦めるものね。そう言い聞かせると救われる
わよね」

声のした方に目を向けると自分が、私服に身を包んだ自分がいた。
直感でわかる。おそらく大学生の頃の自分だと。ただ、何年生かは
わからないが。自分は一方的に話を続ける。

「別に私の人生だもんね。そんなのどうだっていいわよね。つー
か、そんなに夢、夢って……。いつまでもこだわるなんてね。他の友
達も懐かしそうに話すだけで、みんな諦めていたもんね」

と、彼女に肯定を求めてくる。彼女は肯定したかったが、何かモ
ヤモヤするものを感じる。そして、答えを拒否するように再びノブ
に手をかけた。

再び、同じところ。背には扉。彼女はもう一度ノブに手をかけて
回すが、開かない。後ろから声。振り向きたくなかったが振り向く
と、そこには高校の制服に身を包んだ自分が、左右対称になるよう
に、実際はその通りかもしれない、二人いた。彼女から見て右側の
自分が口を開く。

「夢はここに」

左側の自分が引き継ぐ。

「現実もここに」

右側の自分が彼女を見据える。

「こんなに近くにあるのに、叶わない。何故か？何が夢と現実を
妨げる？」

左側の自分が答える。

「それは、自分。夢と現実を繋ぐ唯一の媒体は自分であり、自分以外の何者でもない。夢を叶えたくば、自分で叶える以外にはない」
右側の自分がそのままの、無表情で続ける。

「どうして、諦めたの？」

左側の自分が答える。

「諦めたくて、諦めたんじゃない。逃げたくて、逃げたんじゃない。諦めさせられたのよ。逃げさせられたのよ」

右側の自分が問いかける。

「本当に？ あなたは悪くないの？」

左側の自分が答える。

「そうよ。私は悪くない。周りが悪いの。そうよ。そうに決まってる」

右側の自分が問う。

「誰もあなたを助けられない。それは裏返せば、誰もあなたを傷つけられないということ。全てはあなたが決めたこと。あなたが勝手に自分で傷ついたのよ」

「……」

左側の自分は答えない。

「現実から逃げることで、夢からも逃げる。そして、妥協点を探して、自分を納得させる。しかし、その妥協点には何も無い。あなたの現実も、あなたの夢も。あなたの見つけた希望は、あなた次第で絶望に変わる。あなたは右から見ていたものを左から見た。そして、絶望が見えた」

「絶望は絶望で、絶望とわかっているから、自分を誤魔化せば仲好くやっていけるわ」

「でも…希望の方が…嬉しくなあい？」

「……」

左側の自分は再び黙る。

「もう一度……今見ているものを右から見たらどう？ もしかしたら、もうそれには何の魅力も感じないかもしれないけど……もう

それは輝きをとうに失っているかもしれないけど……絶望よりは綺麗なはずよ」

「私は……もう嫌。もう、二度と希望が絶望に変わるところは見たくないの」

右側の自分が左側の自分の手を掴む。

「そうね。怖いものね。でも、きつと、いいことがある。そこに新しい希望を発見するかもしれない。あなたが変わろうと努力すれば、あなたが希望を見つけようと努力すれば……きつと変わる。きつと、希望は見つかる。……本当にあなたが望むのならば……這つてでも……みつともなくても……誰に笑われても……みんなに後ろ指差されても……手を伸ばして……あなたなら月だって、太陽だって掴めるわ」

「でも……私には……」

右側の自分が左側の自分に笑いかける。

「大丈夫！ 私がついてるんだから！」

左側の自分は下唇を噛んで頷く。二人は二人三脚のように一歩足を彼女の方に踏み出す。

「私は……いつのまにか諦めることになれていた。できることもできないと言い、絶望をあたかも希望のように祭り上げ、誤魔化していた。否定を肯定のように使い。見せかけの自分に満足して……。現実にながら現実にはいかなかった。夢を見ながら夢を見ていなかった」

と、左側の自分が言い、二人はさらに一歩踏み出す。

「祭り上げられた絶望を希望のように崇拜しても、希望は得られない。自分を誤魔化して生きるよりも、本当の自分と向かい合って生きた方が……辛いかもしれないけど……楽しいと思う」

右側の自分が言い、二人は一歩踏み出す。彼女は二人を見つめたまま動かない。

「忘れないで……私はあなた。あなたは私。いつでも、私に頼っていい。時には自虐的になってもいい。時には絶望に身を委ねても

いい。でも、必ず帰ってきて。あなたにはそれができる」

また、一步近づく。

「自分を嫌いになることもあると思う。現実を嫌いになることもあると思う。妄想の希望に縋っていた方が楽なのはわかる。でも、それは、見せかけの希望。あなたが手にするのは、見せかけではない」

左側の自分が言い終わる。一步踏み出し、彼女の前まで来た二人は繋いでいない手を彼女に向けて差し出した。何も言わないが彼女にはわかる。自分だから。そして、二人の手に自分の手を合わせて……彼女は笑って……そして、彼女のいた世界は滅んだ。絶望に塗れていた世界は滅んだ。それが彼女の望んだこと。彼女が見つけた希望。地球があつた宇宙空間には無数に光る指輪が残されていた。それは、彼女のいた世界。彼女のいた地球が滅んだ時であり、同時に彼女が希望を見つけた時だった。そう、新たな地球。新たな世界の再生の時だった。指輪は光に変わり、再生した地球へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6887/>

UN:KNOWN 3

2011年1月26日23時34分発行